

リンドベックの教理論と神道の本質

松野智章

はじめに

戦後における神道研究は史的・考証的研究が主流であり、一部の神道神学を除いて、神道の宗教哲学的アプローチがなされてこなかった。本小論では、現代キリスト教神学の成果の一つであるG・A・リンドベックの教理論を神道研究に応用し、リンドベック自身が展開したキリスト教の三原則と比較する形で、神道の本質に規則の視点から迫るものである。

一 リンドベックの教理論

一・一 宗教理解の三類型

リンドベックの教理論は独自の言語哲学的見解、言語観を背景に有している。この議論は、宗教理解に関する三類型という形で

提起され、言葉との関わりにおいて分類される。その三類型とは、「認知—命題型」・「体験—表出型」・「文化—言語型」と呼ばれるものである。キリスト教における一般的な教理の理解は認知—命題型に立つとされるのに対し、リンドベックは文化—言語型という新たな立場を用意する。

まず、認知—命題型 (cognitive-propositional) とは、どういった立場であろうか。一般的に、教理は真理と対応していると考えられている。この場合の教理と真理の関係は、言葉が客観的事実と対応しているという意味であり、例えば「太陽」という言葉は、指示対象としての太陽と一対一の対応をしている、という言語観に基づくものである。したがって、認知したものは命題形式で表現される。この認知—命題型は、キリスト教教理史では「伝統的正統派の学説がとるアプローチ」(5—24)であり、「教

理が客観的現実について知識を与える命題として機能することや、真理主張をおこなうように機能することに重点を置く」(5-1-2四)立場である。また、教理は命題として主張されるので、己の信じる命題が正しければ必然的に他の教理は偽と理解され、他宗教はちろんのこと、同じ宗教内であっても教理が異なれば相容れることはなく不寛容となるのである。

それに対し、このような不寛容な立場を批判し、正反対の立場に位置するのが体験―表出型(experiential-expressive)である。認知―命題型と異なり体験―表出型は、言葉が客観的事実と対応しておらず、言葉はあくまでも宗教体験を表現したものにすぎないと捉えられる。その宗教体験自体は、差異化が計られず、諸宗教はすべて同じ根源を持つと理解される。したがって、諸宗教は根源的な「何か(究極的な実在)」と向きあったものとして理解され、その宗教体験はキリスト教的表現や仏教的表現で語られることがあったとしても、同じものを表現していると理解されるのである(5-1-4〇)。また、認知―命題型のように教理にこだわらなければならない、体験―表出型は他宗教に対しても寛容になれる。今日においては、宗教多元主義を提唱するジョン・ヒックが、この立場を代表していると言って過言ではない。日本においても万教帰一という言葉があるが、宗教の理解の在り方において体験―表出型と同定できるものである。

それらに対し、これまで紹介してきた認知―命題型や体験―表

出型とは異なる見解をリンドベックは提起する。それが文化―言語型(cultural-linguistic)である。この文化―言語型の「文化」とは、C・ギアーツの影響を受けたものであり、相対主義的立場である。体験―表出型のように、体験を重視し根源を同じとするのではなく、体験を重視しながらも、各々の宗教におけるコンテキスト(文脈)を重視する(5-1-5三-5四)。体験―表出型の宗教の理解とは、この点で異なり、文化―言語型は、キリスト教と仏教は異なる文脈を有するのであるから、個々の文化現象の背後に同じ「何か」を想定することがない。あくまでも、宗教は各々の文脈を通して重要な事柄(生死・正邪・混沌と秩序・意味と無意味といったことをめぐる究極的な問いのすべて)を表現するのである(5-1-7)。また、文化―言語型は、体験―表出型のように言語を軽んじることはないが、認知―命題型の言語観とも異なる。認知―命題型が、言葉が客観的事実と一対一の対応をしていると考えるのに対し、文化―言語型は言葉の文脈を重視する(5-1-5八-5九)。言葉が対象を正しく指示でき、真偽が問える命題形式として表現されるのは、正しい文脈で使用されたときのみであるというのだ。これは、文化―言語型が、その発語者の行為や振るまいも射程に入れて言葉と対象の関係を捉えている、というものである。例えば、野球の「アウト」という言葉がある。この「アウト」という言葉を、野球をしている時以外の、例えばルールを説明するときに発語したとしよう。けれども、そこで発語された

「アウト」という言葉は、野球のプレイ上の「アウト」という意味を持って、その役割を果たしているわけではない。あくまでも、野球のルールの説明として、いかなる時に「アウト」という言葉が使用されるのか説明がなされているだけである。しかし、「アウト」という言葉が、野球のプレイ中に使われた場合にはその意味が異なってくる。プレイ中に「アウト」という言葉が使われる状態にあれば「アウト」は正しく指示対象を持ち命題形式となる。本場に「アウト」なら「真」となり、そうでなければ、誤審として「偽」となる。つまり、リンドベックは、宗教も同じく正しい文脈で使われた時のみ、命題形式として表現されると考えるのである。リンドベックの言葉を借りれば、キリストの心に適うように「個人や共同体を形作る礼拝・告白・従順・契約の傾聴・契約の遵守といった行為において使用されるときのみ」(51-29) 真か偽か判断できる命題形式となるということである。

一・二 教理の本質

リンドベックにとって教理とはいかなる文脈で語られているのか、ということが重要になる。そして、教理が一般的にはキリストの心に適うような文脈において語られているわけではなく、実際、公認の教理や専門的な神学が確言に成功するのは稀なことだ、とリンドベックは言う(51-31)。リンドベックは、教理が「典礼や宣教や倫理的な様態の発言や行動を説明したり擁護した

り分析したり統制したりしている」(51-32)といった別の働きを持つことを指摘する。つまり、機能主義的に教理における規則的役割を強調するのである。

また、さらに、リンドベックは、現存する教理の根底に基底的なメタレベルの規則を想定している。この点を考察するにあたり、リンドベック自身が告白するウイトゲンシュタインの影響は見逃せない⁽¹⁾。ウイトゲンシュタインを介して理解するなら、文化―言語型の立場とは、後期ウイトゲンシュタインの思想である言語ゲーム論の立場にある。言語ゲーム論における言語観は「言葉とは使用である」に示されるように、生活様式と密接に関わりを持つ言葉のやり取りというものであるのだが、ここで重要なのはゲームという比喩が使われている点にある。つまり、言語ゲームとは、行為の中にルール(規則)が内在しているという視点を持つものであり、これは文化―言語型の基盤になっている。この規則はカトリックやプロテスタントという諸宗派を超えたキリスト教という体系全体の規則であり、個々の現存する教理を超えたメタレベルの規則といえる。つまり、リンドベックは教理を各々の時代の制約を受けてメタレベルの規則を表現したものにすぎないと考えているのである。ただ、現実には教理は変わるものもあれば変わらないものもある。リンドベックは、メタレベルの規則に沿ったものは変わらずに残っているか、または表現方法を変えながら機能し続けている、という(51-78、180)。また他に

も、さまざまな教理があり、絶対的でないにもかかわらず不変である場合もあれば、一時的な場合もある(5—162—163)。

例えば、奴隸制に関するものなどは(5—163)、特に時代の制約を受けたものだと理解できる。また、教理化されないが重要な規則も存在する。それは、キリスト教でいうなら「愛」に関する事柄である。これは、キリスト教の文脈に組み込まれており「信仰に不可欠な論理もしくは文法の一部」(5—162)というものである。

ここまでの議論を踏まえるならば、リンドベックのいう「教理の本質」とは、「メタレベルの規則である」と換言することができ、それが教理として表象される。そして、その教理はキリスト教をキリスト教たらしめ、信者の行為を統制したり、信者にアイデンティティを与えたりするものである。

二 キリスト教の三原則

では、リンドベックはキリスト教のメタレベルにおける規則として、具体的にはどのようなものを想定しているのであろうか。

キリスト教においては少なくとも三つの統制原理が機能している。リンドベックは論じている(5—177)。

第一の規則は「唯一神の原理」である。これはアブラハム、イサク、ヤコブ、そしてイエスの神のみが存在するというもの。第二の規則は「歴史的特殊性の原理」で、ある特定の時間と場所

生まれて死んだ、真正の人間に言及する、つまりイエスについて語っているというもの。第三の規則は「キリスト論的最大化主義の原理」(the Christological maximalism)であり、第一の規則と矛盾をきたさない限りにおいて、考えうるすべての重要性をイエスに帰するというものである。特に倫理的なるものはイエスを通して理解されるというものである。これらに反しない限りにおいて、原始キリスト教時代の後に生まれた教理であったとしても、——例えば三位一体論——正統な教理として位置付けられるのである(5—178)。

三 神道の本質

リンドベックの議論を神道に应用する有効性とは何か。神道には、創唱者(教祖)がなく、また教理・教典もない。そのことから、一般的には言挙げしない宗教だといわれている。しかし、神道が全く語られてこなかったわけではない。伊勢神道の渡会家や吉田兼俱をはじめとする中世神道思想、江戸時代の儒家神道・国学、さらには戦前の神道哲学、戦後の神道神学と思想・神学の営みはなされ続けられている。つまり、リンドベックの教理論をもとに神道を捉えることで、思想・神学のメタレベルを想定することができる。そのメタレベルの規則を探究することで神道の本質を考察したいのである。そこで、その足がかりとして「比較」という方法をとる。先に挙げたキリスト教のメタレベルの規則であ

る三つの統制原理を、各々神道神学と照らし合わせながら、神道における三原則の抽出へと繋げたのである。

三・一 神道の三原則

第一の原則は、「神」に関する事柄である。唯一神を原則とするキリスト教に対し神道はどうであろうか。この問いに対し南山宗教文化研究所のキリスト教と神道の比較は、とても重要な示唆を与える。この対話を通して、神道神学者である上田賢治が主張したことは、キリスト教のような一神教ではなく、仏教のような一即多でもなく、神道は多神教であるというものである。上田の神道神学研究の主題は、この「多神教の真理」の探究であったと言つて過言ではないだろう。上田の言う神道における多神教とは、「超越・絶対の觀念が不在」(一〇九)なものであり、「相對觀の存在在世界に成立した宗教で、そのすべてが特殊以外何ものでもな」(一一九)く、「強弱・大小の區別觀を生みこそすれ、自己を絶対化して他の存在性を否定することはありえない」(一一九)性格を持つものである。こうした相對性の在り方は、天つ神と国つ神の關係をみても伺える。つまり、国つ神の象徴である出雲大社が天つ神を相對化する役割を担っているのである。かつて、わざわざ宮中まで出向き、「出雲国造さらには出雲の神は、天皇の御代を祝福する」(三一三七)と出雲国造神賀詞を読み上げ、出雲大社の存在を強調したことは特筆に値する。やはり神を問題とする第

一の規則は、神道においては「多神教の原理」となるであろう。

しかし、多神教という形態は人類学的に見ても無数にあり、神道を他の多神教と區別する条件が必要となる。それが、第二の規則、「天皇という特殊性の原理」である。これは、日本を安らかな国(やすくに、靖国)とするための歴史的存在としての天皇存在を受けとめることである。そして、古事記・日本書紀をはじめとする神話も含め有機的に天皇が神道と関わりを持っているという主張である。例えば、今日における神社の祭りは祈念祭・新嘗祭、さらには大祓と天皇と密接に関わりを持っている。また地鎮祭をはじめとする諸御祈願においても、祓詞や祝詞を通して、天皇、皇室神話がモデルとして示される。即ち、神道は天皇という基準を通して理解されるのだ。²⁾

ここで、一つ疑問が生じるかもしれない。多神教の概念と天皇という存在の關係は矛盾していないのか、または一即多に陥っているのではないのか、という問いである。ここで、一神教対多神教という通俗的な議論の枠組み以外の枠組みを提示したい。それは一神教対多神教という枠組みを批判したキリスト教学者の西谷幸介の議論である。西谷は、日本の神道を指し、これは多神教ではなく「単一神宗教」だと指摘する(412077、2008)。単一神宗教とは、M・ミュラーの宗教進化論における宗教形態の中の一つの概念であるが、一言で説明すると、多くの神の存在を肯定しながら一つの神を至高の存在として位置付け、その神のみを奉

る形態というものである(4-20)。もちろん、これを無批判に神道に当てはめるわけにはいかない。なぜなら、神々の中で天皇のみを奉っているわけではないからである。しかし、天皇というモデルを通して神々の理解がなされ、かつ、位置付けられるという在り方は、非常に「単一神宗教」に近い形態であるということとは間違いない。仏教のいう一即多というような次元、または、キリスト教でいう三位一体というような次元、つまり神の性質の説明とは異なる次元で、神々と天皇は関係を持っている。体系的な理解や解釈、さらには倫理性の基準として天皇存在は機能しており、神々に内実を与えるという構造になっているのである。

では、第三の原理は何か。神道における第一の原理と第二の原理を、さらに規定するのが第三の原理であり、それは「ならわしの原理」である。神道が儀礼宗教といわれるように、神社・祭式・衣冠束帯の規則を重んじることは、もちろんのことであるが、ここでは、神学的に神道神学者の小野祖教が晩年に論じた「ならわしの哲理」を取り上げたい。小野が國學院大学を退職した後、一神社の宮司となり、その体験の中で培ったものをまとめたものである。小野のいう「ならわし」とは、繰り返すことによって成立する哲理である。つまり、無理のない人間性に叶った原理というものだ。小野は、このように述べている。「真淵や宣長は、散々儒教の批判をしている。人間性に反する事を教えても、人間は悪くなるばかりだ、よくはならないという立場だった。有益な

教えでも人情に叶わず、人間の内なる善性を引き出すことが出来なければ、却って、人間を表面だけの善人にしたり、歪んだ性格の人間にする。そういう批判だ。一見暴論のように見えるが立派な見識だ」(2-265)。したがって、神道においては、無理なく繰り返されてきた中にこそ、真理が存在すると考える。神社・祭・倫理・天皇の全てが繰り返される中で存在し続けているものなのである。

四 むすび

以上の神道の三原則「多神教の原理」・「天皇という特殊性の原理」・「ならわしの原理」が、キリスト教の統制原理と比較して明らかになった神道を神道として足らしめる規則である。

こうした神道における俯瞰的研究は、史的・考証的研究ではなされない議論も可能にする。今日、天皇を除外して神道を再評価しようとする向きもあるが、規則論の視点から考察するに、それはスピリチュアルな問題として本質に迫ろうとしているもの、かえって神道の本質を見失っていると指摘できる。また、先の統制原理ののっとって、今日の神社神道も機能していると分析できるようになり、さらなる神道研究や神道が抱える諸問題の考察へと繋げていくことができるのである。

(1) 正確には、ウィトゲンシュタインの言語ゲームではなく、P・

ウィンチにおける『社会科学の理念』の言語ゲーム解釈である。この問題は、星川啓慈・松野智章「本当に、宗教は『言語ゲーム』ではない、と言えるのか? ——『宗教言語ゲーム論』再考」(『大正大学大学院研究論集 第二八号』二〇〇四年、所収)に詳しく論じられた。

(2) 古代律令以前における神祇祭祀をどのように捉えるかが問題となるが、「神道」が他宗教との交わりの中で、自覚されたものであることは忘れてはならない。

(3) 日本思想史家の子安宣邦が展開した今日の神社神道への批判等、神社神道が己が立場から述べるべきことは多い。そのためにも、体系的な神道理解は急務な作業であろう。

引用文献一覧

- 1 上田賢治「神道における普遍と特殊」(『神道神学論考』大明堂、一九九一年、所収)
 - 2 小野祖教「ならわしの哲理」(『國學院雑誌第八二巻一一号』一九八一年、所収)
 - 3 千家尊統『出雲大社』学生社、一九六八年
 - 4 西谷幸介「日本的習合宗教について」(『宗教間対話と原理主義の克服——宗際倫理的討議のために』新教出版社、二〇〇四年、所収)
 - 5 G・A・リンンドベック(田丸徳善監修 星川啓慈・山梨有希子訳)『教理の本質』ヨルダン社、二〇〇三年
- /Lindbeck, G. A., *The Nature of Doctrine: Religion and Theology in a postliberal Age*, Philadelphia: Westminster John Knox Press, 1984

重要参考文献一覧

- * 子安宣邦『国家と祭祀——国家神道の現在』青土社、二〇〇四年
 - * 棚村重行『現代人のための教理史ガイド——教理を擁護する』教文館、二〇〇一年
 - * 南山宗文化研究所編『宗教と文化 諸宗教の対話』人文書院、一九九四年
 - * 西谷幸介『宗教間対話と原理主義の克服——宗際倫理的討議のために』新教出版社、二〇〇四年
 - * 星川啓慈『宗教間対話における「教理」の問題』(『グローバル時代の宗教間対話』大正大学出版会、二〇〇四年、所収)
 - McGrath, A. E., *The Genesis of Doctrine*, Blackwell, 1990.
- (まごのともめぎ)『宗教哲学』大正大学大学院